

日韓生薬学交流史

——杉原徳行の業績と評価

渡辺 晴香、金 善珉、丁 宗鐵

日本医史学雑誌第四十八巻第二号 平成十三年 九月 五日受付
平成十四年六月二十日発行 平成十三年十一月十七日受理

〔要旨〕今回我々は、韓国の伝統医学、漢方医学領域の行政及び薬理学の領域における杉原徳行の功績について調査した。杉原は一九二六年に京城帝国大学の薬理学第二講座教授となって以来、一九四六年まで朝鮮半島や満州の伝統医学に関するほとんどのプロジェクトに関係した。また生薬研究所（現ソウル大学天然物研究所）のようなくつかの研究施設を朝鮮半島に創設した。ソウル大学天然物研究所の元所長等より、日本と韓国の医学及び薬理薬学領域における杉原の門下生より聞き取り調査し、伝統医学や学術資源の保存における杉原氏の功績について、再確認した。

キーワード——杉原徳行、韓国、満州、伝統医学、生薬研究

一、はじめに

近年、過去のわだかまりを捨て、韓国と日本の文化交流が盛んに行われるようになってきた。韓国では植民地政策へ

の反発もあり、これまで戦前の日本人の業績が評価される機会はなかったが、三六年間の日本統治は好むと好まざると関わらず韓国の伝統医学、生薬学研究に大きな影響を与えたと考えられる。

そこで今回我々は、元京城帝国大学医学部薬理学教授杉原徳行の韓国における功績について注目した。敗戦時と朝鮮戦争の際に日本人に関連する資料などの大半が廃棄された為、韓国内には杉原に関する資料はほとんど残されていない。今回、朝鮮時代の杉原を知る、ソウル大学天然物研究所の元所長禹麟根八六歳、呉鎮変九〇歳、(こ息は慶熙大学東西医学研究所所長呉壽明氏)らに直接杉原の功績について聞き取りを行い、再確認した。

略歴と研究テーマ

杉原徳行は第二次世界大戦終戦直後まで京城帝国大学で、戦後は県立岐阜大学で、医学部薬理学の教授として活躍する傍ら漢方、鍼灸についても研究活動を続けていた。

鍼灸領域における業績については別の機会に譲る。杉原の漢方医学に対する姿勢は昭和一四年発刊された彼の著書『漢方処方学』の序文に示されている。「漢方医善導に当たって単に西洋医学をもつて臨めば漢方医をして皮相的に西洋医術を模倣せしめることとなり、反って弊害を招く。宜しく西洋医学を修めた士にして漢方医学について知る所あるの者が漢方善導に当たるべしである。著者は漢方医の現存する朝鮮の地に在ること十余年に及び、漢方医学なかんずくその薬治についての検討を志す者である。そしてここに漢方医学なかんずくその薬治の一端としてあえて本書を発刊する次第である。すなわち漢方医学の真の良さを認識しつつ西洋医学的立場より研究することを強調している。当時としては画期的な発想であり、今日にも通ずるものがある。そのような理念を抱くまでに至った杉原の略歴に触れる。

一八九二年(明治二五年)島根県の出身。中学高等学校時代は苦学し、薬局でアルバイトしている。この間一九一〇年(明治四三年)に日韓併合。杉原は一九二〇年(大正九年)に京都帝国大学医科大学を卒業した後、直ちに森島庫太教授の

表1 京城帝大時代の主な論文(日本薬理学雑誌)

年	テーマ
昭和2年	朝鮮人参(白参)の制糖作用に就ての研究
昭和2年	朝鮮人参(紅参)の制糖作用に就ての研究
昭和3年	漢薬黄精の制糖作用に就て
昭和3年	漢方解熱薬の実験的研究
昭和3年	漢薬苦参の有効性分「マトリン」の薬理学的作用
昭和4年	朝鮮人参を以て飼育せる「ラッテ」に於ける2、3瘧毒の中毒現象及致死量に就て
昭和4年	朝鮮人参を以て飼育せる「ラッテ」に於ける2、3麻醉毒の中毒現象及致死量に就て
昭和5年	糖尿病に用いらるる各種漢薬の効力の価値についての実験的研究(その1)
昭和5年	糖尿病に用いらるる各種漢薬の効力の価値についての実験的研究(その2)
昭和5年	糖尿病に用いらるる各種漢薬の効力の価値についての実験的研究(その3)
昭和6年	朝鮮人参を以て飼育せる「ラッテ」に於ける2、3神経毒の中毒現象及致死量に就て
昭和6年	朝鮮人参と米国人参との比較研究
昭和10年	大豆黄卷に就て(第1報、第2報)
昭和15年	漢薬芍薬の腸管作用に就て
昭和16年	漢薬常山に就て(第1報)
昭和16年	葛根の解熱作用に就て
昭和17年	ごめなでしこ根(銀柴胡)の「サポニン」に就て
昭和17年	桂皮の解熱作用及び血管作用
昭和17年	漢薬常山の薬理学的並に化学研究
昭和18年	艾葉、茜根及び三七根の止血作用に就て
昭和19年	梔子(くちなし)の作用に就て

門に入つて薬理学を専攻した。一九三三年(大正一二年)に京城医学専門学校に講師として赴任した。その後二年間欧米留学をした後、一九二六年(大正一五年)創立されたばかりの京城帝国大薬理学初代教授に就任し、薬理学第二講座を担当した。これを機に本格的に薬用人参を中心とした漢薬の研究を始めた。表1に主な杉原の主な漢薬研究論文を示す。

杉原の研究テーマが漢薬へ傾注した理由と

表 2 杉原徳行の東洋医学関連の主な著作

漢方処方学	第1巻	昭和16年	金原書店
漢方医学	思想編	昭和25年	永末書店
漢方医学	傷寒論編	昭和31年	永末書店
漢方と鍼灸	第1号～31号会誌	昭和36年～38年	東洋医学研究会
金匱要略講義		昭和56年	出版科学総合研究所

してはいくつかの要因が考えられる。学生時代薬局で働いていた時、漢薬を扱っていたこと、また島根県は当時日本有数の薬用人参の生産地であったこと、さらに森島教授が蟾酥の研究も行っていたことにも影響を受けたと考えられる。杉原は研究指導の傍ら漢方医学の研究著作を行っている(表2)。杉原は一九二八年(昭和三年)に朝鮮総督府専売局より薬用人参に関する調査嘱託を受け、一九三三年(昭和八年)には朝鮮総督府警務局より漢薬調査研究事務嘱託され、その後生薬研究所創設に関する事務嘱託を受け一九三九年(昭和十四年)京城帝大付属生薬研究所を設立し所長を兼任した。昭和二〇年六月には京城帝大附属大陸資源科学研究所における研究嘱託をうけたが、敗戦となり一九四六年(昭和二十年)五月三十一日京城帝国大学教授を退官した。日本へ帰国後、山口県立医学専門学校講師、岐阜女子医学専門学校教授、岐阜県立学校長、岐阜県立大学医学部長などを歴任した。^②昭和三七年三月に退官まで、第三三回日本薬理学会総会、第一二回日本東洋医学会総会を開催した。^⑤退官後は京都の長岡京市に隠居しながらも、明治鍼灸専門学校などの鍼灸の分野で教鞭をふるった。一九七六年脳軟化症から永眠された。

京城帝大での業績

杉原の朝鮮時代の主な業績としては、薬理学教室での薬用人参の薬化学的研究の他、京城帝大付属生薬研究所の設立、朝鮮半島から旧満州にかけての漢薬調査研究、^②济州島の薬草栽培所の開設が挙げられる。

一九三九年に設立された京城帝大付属生薬研究所は、その後薬学部に移管されたが、場所はそのまま医学部付属院内に残り、現在ソウル大学天然物研究所として存続している。ユネスコとW

H O から天然物化学研究センターとして指定され、国際協力研究などアジアの生薬研究センターとして様々な活動がなされている。⁽⁶⁾天然物研究所は一九九九年十二月創設六〇周年を迎えたが、記念式典において初代所長であった杉原について言及されることはなく今回の我々の訪問により改めてその功績が確認された。

杉原は石戸谷勉と共に朝鮮半島から旧満州、モンゴルにかけての漢薬調査研究を手掛け、採取された約一五〇〇点の漢薬は今も石戸谷コレクションとして天然物研究所内に大切に保管されている。これらの標本は、朝鮮戦争の際、破壊されそうになったが、杉原の門下生であった後のソウル大学薬理学教授呉鎮変の必死の努力によって現在もほぼ当時のまま保存されている。石戸谷コレクションはアジアの生薬の標本としても貴重であり、*Chinesische Drogen* として出版され、漢方薬を常用する韓国、中国、日本の漢方生薬標本の基準の一つになっている。

杉原は生薬研究所での研究活動の他、漢方薬や生薬に関する行政指導や実際の栽培指導も行った。たとえば濟州島に薬草栽培所を開設し朝鮮半島における漢薬の自給体制と品質の向上に尽くした。濟州島の薬草園はその後、濟州農科大学に引き継がれ今日に至っている。また日本国内や満州国、中国の漢方家とも積極的に連絡を取りあい、今日という漢方国際ネットワークの確立をめざした。特に昭和一五年満州国の漢方医存続の政策決定にあたっては中心的役割を果たした。⁽⁷⁾杉原の担当した薬理学第二講座は京城帝大で最も多くの医学博士を輩出した。杉原を慕った多くの門下生がいたが、その中には、後のソウル大学天然物研究所の所長呉鎮変ら、全羅南道大学李鐘綸、曹圭璿、金永寅、釜山大学金尚泰教授らなど、韓国の医学薬学界のリーダーとなった人物が多くみられた。⁽⁸⁾

杉原は帰国後も、岐阜県立大学医学部薬理学教授として漢方薬を中心に研究を続けた。日本における門下生では坂口弘(前日本東洋医学会ならびに国際東洋医学会会長)、江田昭英(元岐阜薬科大教授)など日本の東洋医学、生薬学の指導者が生まれた。一九六二年に韓国薬理学会に招待され渡韓した際、京城帝大時代の教え子達によって大いに歓迎を受けた。日韓国交回復前に特別ビザにより正式に韓国に招待された医学者は杉原が最初といわれていた。

おわりに

朝鮮に赴任することにより杉原は新しい自分のライフワークを見出し発展させ、またこの領域の多くの弟子を育てた。今回、朝鮮時代の杉原の弟子達より、杉原の功績について、直接再確認した。現在は孫弟子の世代であるが、この領域で杉原の指導により多くの研究者が日韓で育っている。日韓国の生薬学、東洋医学の研究者における、杉原の影響からも杉原の功績の大きさを伺い知ることができた。

参考文献

- (1) 杉原德行「漢方処方学」第一巻 金原書店、東京、一九四二年
- (2) 杉原教授還暦祝賀会編集「研究業績目録」一〜二頁、岐阜、一九四七年
- (3) 杉原教授古希祝賀会編集「岐阜県立医科大学薬理学教室研究業績目録」一頁、岐阜、一九六二年
- (4) 矢数道明「漢方薬の近代薬理学的研究総覧」『漢方の臨床』三周年特集号 百十六〜百五十一頁、一九五一年
- (5) 社団法人日本東洋医学会「漢方日本東洋医学会五十年史」百三十六頁、春陽堂、東京、二〇〇〇年
- (6) ソウル大学校天然物科学研究所目録 十〜十七頁、ソウル、一九九八年
- (7) 矢数道明「明治百十七年漢方医学の変遷と将来 漢方略史年表」十四頁、東京、一九七九年
- (8) 杉原德行「韓国の医科大学を訪ねて」医海時報 三頁、一九六二年

(東京大学医学部生体防御機能学講座)

A Revaluation of the Late Dr. Noriyuki Sugihara in Korea

Hareka WATANABE, Son-Min KIM and Jong-Chol CYONG

We investigate the achievements in pharmacology and administration in the field of traditional Korean and Kampo medicines by Dr. N. Sugihara.

Dr. Sugihara became a professor of the 2nd dept. of pharmacology, School of Medicine, Keijo University at Seoul in 1926. Since then, until 1946, he was involved in almost all the projects related to traditional medicine in Korea and Manchuria. Also he founded several research centers in Korea, such as the Natural Product Research Institute of Keijo University (the present Natural Product Research Institute of Seoul National University).

We confirm Dr. Sugihara's contribution to traditional medicine, based on an investigations of his academic records from his disciples in Korea and Japan, including the former director of Natural Product Research Institute.